

第Ⅲ章 報告書の記載について

第1節 地区の設定（第2図、第6表）

昭和59年度からの大湯環状列石周辺遺跡(平成元年度まで。平成2年度から大湯環状列石、平成4年度から特別史跡大湯環状列石に改称)の発掘調査開始に当たって便宜上第2図のように史跡をA～Hの8つに区画し、同一調査区内で調査が数度にわたり実施されたときはA1区・A2区とした。しかし本報告書を記述するにあたって、万座環状列石・野中堂環状列石と各地区の位置関係をはっきりさせるため、遺構の分布状況をもとに下記(第2図赤線区分)のように地区設定を新たに行った。

(1) 万座環状列石

- 【万座環状列石】 : 万座環状列石本体を示す。
- 【万座隣接地】 : 前区分のD1区～D8区がこれにあたるが、環状列石を中心に掘立柱建物跡(群)、土坑・フラスコ状土坑が同心円状に分布する範囲とした。第411号環状配石遺構と第401号環状配石遺構を結んだライン南側にみられる東西方向に延びた幅約10mの空白帯を万座北側地区との境とした。
- 【万座北側地区】 : 前区分のF区全域とD1区・D3区の台地縁に分布する遺構を含めた地域とする。列石の西北西の台地縁に入り込んだ沢頭及び同北部に広がる遺構密集域で、竪穴住居跡や環状に配置された掘立柱建物跡(群)、環状配石遺構が分布する。
- 【万座西側地区】 : 列石西側の台地縁一帯とした。前区分のD2区西部、D9区、G3区を範囲とする。竪穴住居跡や土坑が分布する。
- 【万座南側地区】 : 前区分のG1区、G2区を範囲とする。配石遺構群やフラスコ状土坑群が分布する。

(2) 野中堂環状列石

- 【野中堂環状列石】 : 野中堂環状列石本体を示す。
- 【野中堂隣接地】 : 前区分のB1区～B4区にあたる。環状列石を中心に掘立柱建物跡(群)、土坑、フラスコ状土坑が同心円状に分布する範囲とした。
- 【野中堂南側地区】 : 環状列石の南側、前区分のB3区南端部にあたる。配石遺構や配石列、焼土遺構が分布する。

(3) 一本木後口地区

- 【一本木後口地区】 : 前区分のA1区～A3区がこれにあたる。本報告書では狭義的に野中堂環状列石の東側300m地点で検出された配石遺構群を示す。

第2節 検出遺構の分類

19種の遺構が検出されている。本報告書をまとめるため、これまでの調査で確認された各々の遺構について便宜的に次のように分類した。

第6表 地区の設定

	本報告書で使用した地区と範囲		発掘調査区と調査年度・面積
万座環状列石	環状列石	環状列石本体 及び出入口施設	D区 平成11年度 2,110㎡
	万座隣接地	列石を中心に建物跡、土坑、フラスコ状土坑が同心円状に分布する地区。およそ列石を中心に半径27mと78mの円を描いた範囲	D1区 昭和62年度 1,172㎡(台地縁側の一部を万座北側地区とした) D2区 昭和63年度 1,576㎡(調査区西側の一部を万座西側地区とした) D3区 平成5年度 1,960㎡(調査区西端部を万座北側地区とした) D4区 平成5年度 1,220㎡(調査区北半を万座北側地区とした) D5区 平成4年度 1,778㎡(調査区北側の一部を万座北側地区とした) D6区 平成6年度 2,656㎡ D7区 平成7年度 3,176㎡ D8区 平成10年度 1,864㎡
	万座北側地区	環状列石の北西～北側の台地縁側を中心とした地区。列石を中心に半径78mの円を描いたその外側の地区	D1区 昭和62年度 1,172㎡(台地縁側の一部を万座北側地区とした) D3区 平成5年度 1,960㎡(調査区西端部を万座北側地区とした) D5区 平成4年度 1,778㎡(調査区北側の一部を万座北側地区とした) F1区 平成元年度 1,347㎡ F2区 平成2年度 2,810㎡ F3区 平成4年度 958㎡ F4区 平成8年度 3,878㎡ F5区 平成9年度 3,410㎡ F6区 平成10年度 439㎡
	万座西側地区	環状列石の西～南西側の台地縁側を中心とした地区。列石を中心に半径78mの円を描いたその外側の地区	D2区 昭和63年度 1,576㎡(調査区西側の一部を万座西側地区とした) D9区 平成14年度 760㎡ G3区 平成14年度 785㎡ G4区 平成15年度 1,485㎡
	万座南側地区	環状列石の南側で、列石を中心に半径78mの円を描いたその外側の地区	G1区 平成3年度 1,519㎡ G2区 平成10年度 1,800㎡
野中堂環状列石	環状列石	環状列石本体 及び出入口施設	B4区 平成13年度 297㎡
	野中堂隣接地	列石を中心に建物跡、土坑、フラスコ状土坑が同心円状に分布する地区。列石を中心に半径22mと66mの円を描いた範囲	B区 昭和60年度 550㎡ B2区 平成12年度 2,745㎡
	野中堂南側地区	環状列石の南側で、列石を中心に半径66mの円を描いたその外側の地区	B3区 平成13年度 235㎡
一本木後口地区	一本木後口地区	一本木後口地区で検出された配石遺構群、土坑群、弧状配石を含んだ全域	A1区 昭和59年度 1,825㎡ A2区 昭和60年度 1,320㎡ A3区 昭和61年度 1,222㎡

1. 環状列石

本報告書では、環状配石遺構との混同を避けるため「配石遺構（組石遺構）の集合体で、これらが円環を描くように配置されたもの」とする。なお2つの環状列石については「万座」・「野中堂」と表現している場合もある。

2. 配石遺構

「石を使用して構築されたもの、ある目的をもって石を配置した遺構」の総称として「配石遺構」の名称を使用した。形態や使用される石材の違いなどから下記のa～fに分類した。なお、本来ならば石囲炉も構築材として石を使用しているが、この分類からは除外した。

a 環状配石遺構

川原石の長軸(短軸)を繋ぎ、円環をつくるもので、一部に張出施設を持つ。中央に地床炉を持ち、規則的に配置された柱を持つもの。

b 方形配石遺構

川原石の長軸を繋ぎ、石を方形に配置するもの。基本的には張出施設や地床炉、柱を持たない。

c 配石遺構(組石遺構)

数個～十数個の川原石を並べ、組み合わせたもので平面形は多様である。配石遺構下に埋葬施設が存在するときは「配石墓」と呼ぶ。なお、「第V章 縄文時代の遺構と遺物 第1節 遺構 1. 環状列石」の項では、前提書『大湯町環状列石』にならい「組石遺構・組石墓」という用語を使用している。

また、「第V章 第1節 1. 環状列石」及び「2. 配石遺構 (3)配石遺構」の項において、形態分類を記載したが、「1. 環状列石」の項では『大湯町環状列石』・後藤守一が行った形態分類を、「(3)配石遺構」では鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)』の形態分類を使用し、「第22表」に配石遺構形態の比較表を載せた。

d 集石遺構

拳大～人頭大の礫(角礫が多い)を多量に集合させたもの。平面形は様々なものがある。集石遺構下に浅い土坑を持つものもある。

e 配石列

川原石を直線的、曲線的に並べたもの。万座・野中堂環状列石の外帯から延びた石の列は環状列石と一体的なものとして取り扱った。

f 立石遺構

単体の川原石を据えたもので、石を据えるためにピット(小土坑)が設けられる。

3. 柱穴状ピットと掘立柱建物跡・柱穴列

a 柱穴状ピット

柱を据えるために掘られた穴。直径10cmに満たないものや1mを超えるものもある。深さは様々である。土層断面に柱痕がみられるものもある。

b 掘立柱建物跡

同規模の柱穴状ピットが規則的に配置されるもので、方形(4本)、五角形(5本)、六角形(6本)、多数の柱穴状ピットが円形に配置されるものなどがある。

C 柱穴列

同規模の柱穴状ピットが3個以上、等間隔に並んだもの。

4. 竪穴住居跡

平面形態は円形を呈するものが多い。規模は様々である。地面を掘りくぼめ、その内部に炉がつくられるもの。屋内外に屋根を支える柱穴を持つ。

5. 竪穴遺構

平面形態・規模は竪穴住居跡に類似するが、炉跡などが検出されないもの。

6. 炉 跡

a 石囲炉

川原石を円形、方形などに組み合わせたもので、その内部に火を焚いた痕跡を残すもの。

b 埋設土器炉

土器を埋設し、その内部で火を焚いたもの。

7. 焼土遺構

石囲炉や埋設土器炉のように区画する施設を持たず、地面(地表面)に加熱された痕跡が残るもの

8. 土 坑

a Tピット

平面形が長楕円形、断面形がV字・U字状を呈するもので、「トラップピット」・「陥し穴状遺構」と呼ばれるもの。

b フラスコ状土坑

土坑の口径部より底部が広い土坑で、深さは様々である。「袋状土坑」と呼ばれている土坑や掘り方が歪で「長靴状」を呈するものも本類に含めた。

c 土 坑

地面を掘りくぼめた穴。平面形は円形、楕円形、方形を呈し、断面形は箱型・逆台形状を呈する。

9. 埋設土器遺構

小土坑に土器を埋設したもの。

第3節 遺構の記載について

各遺構の記載については観察基本項目を設け、それに沿って再度観察・検討を加えた。

基本項目

【ア. 形 態】

史跡全域から検出された同一種の遺構を対象に形態分類を行い、全域・各地区の形態の類似性・相違点を把握した。

【イ. 規 模】

史跡全域・各地区の同一種の遺構を対象にグラフなどを活用しながらドットの集約状況を確認し、各地区の規模の類似性・相違点を把握した。

【ウ. 確認面と構築面】

各地区で検出された遺構の確認面と検出面について記載した。また特記すべきものについてはその状況を記載した。

【エ. 遺構の堆積状況】

人為・自然堆積を再確認し、基本的な堆積パターンを把握した。特徴的なものについては模式図を作成し、説明を加えた。

【オ. 出土遺物】

遺構の性格、構築時期を知る上で重要な資料である。遺構から出土した完形・復元土器、特殊な遺物について書き出したほか、実測図を添付した。

【カ. 重複関係】

代表的な重複関係を書き出し、各地区の遺構の流れ(変遷)を把握した。

【キ. 時 期】

遺構の構築時期については、出土遺物、重複関係及び遺構確認面から検討した。

遺構の時期決定を大きく左右するものは出土土器である。本遺跡では土器の分類・分析が進んでいないため、後期前葉～中葉の土器については成田滋彦氏「3. 後期の土器 青森県の土器」『縄文文化の研究 4縄文土器 II』の編年を、後期中葉以降の土器については磯崎正彦氏「第16節 十腰内遺跡 5. 遺物 土器」『岩木山 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』の編年を使用した。

ただし、後期前葉の土器について成田氏は、前十腰内Ⅰ式、十腰内Ⅰa式・Ⅰb式と3分類しているが本報告書ではこれを一括して十腰内Ⅰ式として記述した。

なお、本遺跡出土土器については『報告書Ⅱ』において、分類・分析する。

遺構のデータを記載した各表に、構築時期の欄を設けている。その時期は各報告書に記載されたものである。

【ク. 分 布】

史跡全域、地区毎に各遺構の分布状況をドットで示し、地形や等高線などを参考に特徴的な分布を把握した。

【ケ. 性 格】

これまでの報告書で示した性格について再度検討を加え、性格を明確にした。